

No.191

令和2年12月18日

【発行】

豊橋市立青陵中学校 校長室

t-asai-hideo@toyohashi.ed.jp

Rising Sun



「継続する心」 ～その2～

◆大きな努力は続かない 小さな努力は生活の一部になる

プロ入り後、4年間はパツとした成績は残せなかった。5年目の1988年、PL学園から立浪が入団した年、オープン戦の開幕投手に指名された。勇んで登板したが、あえなく初回7失点KO。ベンチに戻ると星野監督から「死ぬまで走ってこい！」の指令。3時間半走り続けた。走り続けているとマネージャーに呼ばれ監督室へ。星野監督から「今年どうしたい？」と尋ねられた。その後「アメリカのキャンプに行かないか」「11月までアメリカで野球をやってこい」と言い渡された。ドジャースとの交換留学生だった。

◆恩師アイク生原氏との出会い

アイクは愛称で、本名は生原昭宏(いはら・あきひろ)。愛称から日系人と思われがちだが、純然たる日本人。早稲田大を卒業後、社会人野球を経て当時東都大学リーグ3部だった亜細亜大野球部監督に就任。4年で1部に昇格させた。

渡米時ドジャースの会長補佐だった生原氏は、とにかく野球が好きな人。モチベーションは下がったことはないが、アメリカ行きを命じられてふてくされて野球をしていた自分との2人3脚の野球が始まった。

生原氏曰く

- ・野球のレベルは日本の方が上
- ・ピッチャーは日本が世界一
- ・アメリカはパワー、馬力がある
- ・日本はWBCで十分対抗できる

選手の数と試合の多さはアメリカにはかなわない。ドジャースの4軍だったが、4軍でも4月から8月までの5か月で150試合をこなす。日本ではコーチの許可がないと試合に出られないが、アメリカでは試合で結果が出ないとクビになってしまう。

◆生原氏から教わったこと

- ・ボールを上から放しなさい

- ・「高めに投げるな」ではなく「低めになげなさい」
- ・新しい球種を覚えなさい

新しい球種については、何をやってもだめだったが、内野手から教えられた「あのボール」には少し手ごたえがあった。

ある試合でのこと。敗戦処理として出番が回ってきた。2アウト2、3塁、2ストライク1ボール。大事な場面で「あのボール」のサインが出た。思い切って「あのボール」を投げたら空振り三振。

それからというもの先発ローテーション入りを果たし、その地区のオールスターゲームにも選出された。

◆日本に帰ってこい！

8月。アイク生原氏から呼び出された。星野監督からの「日本に帰ってこい」を告げられた。「11月までアメリカで野球をやってこい」と言って送り出しておきながら、途中で「帰ってこい」と言われ、「冗談じゃない！」と思ったが後ろ髪を引かれる思いで帰国。ところが、アメリカで通用したことが日本でも通用した。8月から5勝をあげ、セ・リーグ優勝。日本シリーズで先発も果たした。この年のオフに立浪と同じ年俸(3倍)になった。

1軍が夢だった選手が、勝つことが目標になった。そこからは順調な野球人生を歩むことができた。「何か変わろう」という思いで身につけたスクリーボールのおかげで、50歳まで続けられた。

◆お前ら。意外と時間はないぞ！

若い頃は「自分のために勝つ」ことを意識していたが、40代になった頃には「自分が勝つことがチームのため」と思うようになった。この頃「山本さんを励みにしています」「活躍している姿を見ると元気になります」などの応援メッセージをいただくようになった。そうしたメッセージに応えようと「1年でも長く続けよう」と思うようになった。

ベテランの域に入ってから、若い人と同じことを

するが力は8割」にするようにした。ただ、練習は休まなかった。シーズン終了3日後から練習していた。

40代になると、キャンプの練習メニューは任されるようになった。若い頃は「キャンプが始まる頃には試合で投げられる体に」という思いで調整していたが、「キャンプが終わる頃には投げられるように」に変わっていった。

「三日坊主」とは、やらない理由を探すこと。小さなことでも毎日続けることが大切。たとえ10分のウォーキング+ジョギングでも、続けることが大切。

昔から「最近の若いもんは…」と言われるが、「最近の若いもんは…、大したもんだ」と思う。かつては140kmがすごかったが、今は150km台を投げるピッチャーがいっぱいいる。がたいが大きくなったのがその理由か。でも、足元は弱く感じる。

最近の若いもんは、無駄なことはしない。でも、無駄なことの中にもいいことはある。そんな若いもんに対して「お前ら。意外と時間はないぞ」と言いたい。小中高の12年間は長い、プロの3年間はあっというま。若いもんに対しては、「ユニフォームの着こなしと髪だけはしっかりしろ」と言い続けてきた。最近乱れてきているのが、少し心配。巨人、阪神、広島はひげもNG。日本人の8割は外見で人柄を決めるといわれるので、ユニフォームの着こなしと髪には気を使わなくちゃいけない。

◆ちりは積もらせる

井端は秋季キャンプで飛躍した。自分を第三者的に見る目に長けている。彼は右打ちに磨きをかけた。右打ちが多くなるとインコースを狙われる。インコースに投げられれば、見逃さず引っ張る。好循環が生まれた。

昨秋、阪神の臨時コーチを依頼された。改めて指導は難しいと感じた。言葉を変えた方が選手にはよく伝わるということがわかった。また、「選手がダメなら自分（コーチ）の責任、選手の手柄は選手のもの」を実感した。

◆緊張感とどう向き合うか

「恥をかきたくない」「みんなに申し訳ない」という思いが先立ち、登板するときはずっと緊張していた。ほんのちょっとした差で勝ったり負けたりするのがプロの世界。緊張して当然、準備をしっかりとるしかない。どこかで踏ん切りをつけることが大切。うまくいかな

かったら準備が足りなかったと思え。

◆小さな運をつかむ

これまで野球にうそをついたことはない。グラウンドにつばを吐いたり、白線を踏んだりしたこともない。ホームベースを踏むのはホームインしたときだけ。グラブとスパイクの手入れも自分でしてきた。汚れていたら失礼だと思う。

ちょっとした運で、結果は全然違ってくる。小さな運をつかむためには、ふだんどういふふうに行動しているか、どういふふうに住んでいるかにかかっていると思う。

◆モチベーションの維持

2015年の引退会見で、「世界でいちばん幸せな野球選手」「悔いはあるが後悔はしていない」と話した。できないことはいっぱいあったので、結果には悔いはあるが、経過に後悔はないということ。

「時間がない」「年をとったから」を言い訳にしない。今の自分は来年の自分より若いんだから。

